## L12a　2008年のほうおう座流星群の活動

○渡部潤一、佐藤幹哉、春日敏測 (国立天文台)

筆者らのグループは、ほうおう座流星群のダスト・トレイルの計算を行い、2020年までの間にいくつかの出現の可能性があることを見いだしている（佐藤・渡部、本学会)。特に2008年には、1866年に母天体から放出されたダスト・トレイルと地球が接近し、流星群の出現の可能性があり、その極大予測は11月8日の4時（UT）頃、予測放射点の位置は赤経：7.0度、赤緯：-5.5度となった。

われわれは、この流星群を観測するため、この時間帯において、この予測放射点からの流星の観測が可能なハワイ・マウナケア山麓のハレポハク中間宿泊所にて、3日間約18時間にわたるビデオ観測を行った。　その結果、ほうおう座流星群の流星について、予想極大の前後に、一時間あたり、1-2個の出現を捉えることに成功した。この結果は、母天体が1866年当時も有意に彗星活動をしていたことを意味している。本講演では、この流星観測の解析結果と共に、彗星活動のレベルについて議論する。